

白雲片片

第二十回

無情説法

むじょうせっぽう

今回は雲巖曇晟禪師、洞山良价禪師が登場する古則を紹介します。

正法眼蔵三百則 第四百十八則

洞山悟本大師、雲巖に参じて問う、無情の説法は何麼の人か聞くことを得る。巖云く、無情の説法は、無情、聞くこ

とを得。師云く、和尚は聞くや否や。巖云く、我れ若し聞くことを得ば、汝、即ち吾が説法を聞かざらん。師云く、若し恁麼ならば、即ち某甲、和尚の説法を聞かじ。巖云く、我が説法すら汝尚お聞かず、何に況んや無情の説法をや。師、乃ち偈を述べて雲巖に呈して曰く、也太奇、也太奇、無情の説法は不思議なり、若し耳を將つて聞かば声現ぜず、眼処に声を聞きて方に知ることを得ん。

現代語訳／巖は雲巖曇晟禪師、山は洞山良价禪師。悟本大師は洞山良价禪師が遷化後に朝廷から贈られた諡号（しごう）。無情は樹木、石、水など、一般的には感情や心理作用がないと思われている植物や無機物を指す。逆にそういつ

たものがあるものを有情という。

洞山良价禪師が雲巖曇晟禪師の所に参じて質問をしました。

山「無情の説法は誰が聞くことができま

るか」

山「和尚さんは聞くことができますか」

巖「わしが聞くことができたらならば、お前はわしの説法を聞くことができ

ないだろう（自分が無情の説法を聞くような立場になったら、お前にはわしの説法が聞こえなくなるだろう）」

山「もしそうならば私は和尚さんの説法を聞きません（和尚さんの説法を聞くことで無情の説法が聞けないならば和尚さんの説法を聞きたくない）」

巖「わしの説法ですらお前は聞かない、どうしてそういう状態で無情の説法を聞くことができるだろうか（聞けるわけがない）」

洞山良价禪師は、この言葉を聞いて気付くところがあり、雲巖曇晟禪師に詩偈を作つて呈上しました。

大変素晴らしい（也た太だ奇なり）

大変素晴らしい

無情の説法は頭で考えても分からない

い

もし耳で聞こうとしたならば無情の

説法は聞こえてこない

眼で声を聞くなれば知ることができ

るだろう

この古則は和文正法眼蔵「無情説法」に出てきます。道元禪師は上述のお二人の他に南陽慧忠禪師、天童如浄禪師、投子大同禪師の言葉を引用されて解説をされています。

通常、人間以外の有形無形の事柄は説法なんてできないと考えます。しかし、弁道話の「十方法界の土地、草木、牆壁、瓦礫みな仏事をなす」との言葉にあるように、目の前のごくありふれた物をはじめ、全てが常に仏道（自分の為すべき事）を行じており、喋らなくても、音を発していなくても説法をしているのと同じだ、という捉え方をします。そして、道元禪師はここからさらに進めて示されています。

『什麼を喚んでか無情と作す、しるべ

し、無情の説法を聴く者、是れなり。什麼を喚んでか説法と作す、しるべし、吾

無情なるを知らざるは是れなり。』

これは道元禪師が天童如浄禪師の言葉を紹介された後に書かれている文章です。無情という言葉の意味が、木や石などに限定されていないようです。では生きてる以上、感情や心理を完全に失うことがない人間が無情である場合というのは、人間が自身の感情や心理の働きに振り回されていない状態、というふう

に解釈すればよろしいのでしょうか。その前提で上述の道元禪師の言葉を読むと、自分の感情や心理に振り回されていない人の説法を聞いている人を無情と呼ぶ、そして感情や心理に振り回されていない人自身が、自分が無情である事に気が付いていない（自覚がない）場合の

言葉や行いなどが説法である、ということでしょうか。

和文正法眼蔵の「無情説法」の終盤、投子大同禪師がある僧の質問に対し、「無情説法というのは、悪口を言わない事だ（粗悪な言葉を使わない）」と返事をされた話が書かれています。悪口を言わない、ということには黙るということも含まれているかと思えます。道元禪師が無情説法についての長い解説の終わりのほうにこの話を持って来られたその真意は如何なるものでしょうか。

そして道元禪師は締めくくりに次の様に述べられています。「しるべし、無情説法は、仏祖の総章これなり」、「無情説法というのは仏祖の全てだ」。参考文献／西嶋和夫著「真字正法眼蔵提唱中巻一」、同著「現代語訳正法眼蔵第八巻」、駒沢大学編「禅学大辞典」

薬山惟儼

雲巖曇晟

洞山良价

曹山本寂

雲居道膺